

# 語源と語義から見たペアワードの諸相

## －『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』早稲田写本において

青木 繁博

Etymological and Semantic Aspects of Paired Words  
in *Waseda MS (NE3691)*

Shigehiro Aoki

本稿は、過去に行ったペアワードの抽出と分析の研究に基づき、ロマンス語源の語句を説明するためと解釈されることの多いペアワード表現について、その機能や役割の様々な可能性に光を当てんと試みるものである。

ペアワード分析の対象範囲について

ペアワードを論ずる際にまず最初に問題となってくるのは、やはり、何を分析の対象とし何を外すかであろう。本稿における分析を進めるにあたって、その対象範囲を定める必要がある。ここでは、ペアワードの取捨選択について留意した二点を述べたいと思う。

まず一点目は、ペアワードの形態について。

Koskeniemi (1968) を援用し、谷 (2003) は、ペアワードを形態の違いによって以下のように分類している。

- 1) 2語から成る通常のワードペア
- 2) 3語以上から構成される
- 3) 一語とその同義的な句から成るワードペア

谷 (2003) の分析においては、「特に1)の2語から成るワードペアに焦点を置き、2)の3語から構成されるワードペアは必要に応じて取り扱い、3)については対象外とする。」(p.20)とあり、フレーズ相手のペアワードを考察に含めないなど整理されている。語だけからなる純粋な形でのペアワードを集中的に扱うことにより、ペアワードを分類し、そこで行なわれたような語源等の集計および詳細な分析を可能にしており、そのような取捨選択は妥当なことにも思われる。

対して本稿では、2語からなるペアワードに加えて、3語以上からなるものや句からなるものも分析対象としている。ペアワードの要素として用いられた一語一語の意味、また各々の意味的な関係も考察するために、広く対象を取る必要があることと、1)で用いられた語が2)や3)の形態でも用いられる例(実際にいくつか見ることになる)も併せて考察することを目論んでのことである。

さらに一部のペアにおいては、ペアワードとして1)から3)のいずれかの形で用いられたものに加えて、それにはあてはまらない形態、すなわちペアワードではないが、語句が強く関連付けられて用いられた例を見ることができる。こうした、いわばペアワードの関連表現とも呼べるような例を見ることによって、純粋なペアワードやその語句の特徴が浮かび上がってくるのではないかと考えている。

二点目は、ペアワードの頻度について。

Koskenniemi (1968, 1975) などのように、ペアワードの一つの条件として、頻度、すなわち繰り返し用いられることが挙げられる場合もある。

もっとも一口に頻度と言っても、当該作品中での頻度の他、作者個人の用例、ひいては中世英語全体での使用を指す、など様々な切り取り方が可能である。どこに立脚しペアワードの頻出度を定めるかについては常に注意が必要であろう。

当然、Koskenniemi (1975) などは、上述した問題点も念頭に入れつつ、幅広く中世英語を見渡した裏付けからペアワードを論じていたものであるが、対して本稿は1作品、しかも現段階ではその内の2章についてペアワードを分析するもので、この場において作品外まで見渡し包括的に論ずるには不適切であり、かつ著者も未だ準備不足である感は否めない。

よって、当該テキスト中にも、おそらくは別の作品にも共通するペアで、ペアワードの様々な面を論ずるに適した例となるであろうペアも多々見られるのだが、本稿で扱う範囲における出現回数が少ないものについては、重きを置かないこととする。本稿では、あくまでも当該テキストの範囲に限り、

- ・少なくとも複数回は現れるペアワード

または、その組み合わせとしては単発であるが、

- ・異なる組み合わせで何通りもペアワードが作られる語からなるペア

という基準を設け、これに沿ってペアワードを分類し、分析を進めていきたい。

先行する研究と、本稿における考察の進め方について

Koskenniemi (1975) において、それまでのペアワードについてなされた見解に反対するために、*The Book of Margery Kempe* 中のペアワードを構成する語の語源を分類した表が提示されている。

*Etymological Distribution of Word Pair Components*

Number of Word Pairs	
Anglo-Saxon + Romance .....	65
Romance + Anglo-Saxon .....	47
Anglo-Saxon + Anglo-Saxon .....	86
Romance + Romance .....	52
Norse + Anglo-Saxon .....	4
Anglo-Saxon + Norse .....	3
Norse + Romance .....	3
Romance + Norse .....	2
Total 262	

“ The large proportion of word pairs consisting of purely native or purely Romance elements indicates, first of all, that the device is not primarily used to interpret loan-words by means of native synonyms. ”

Koskenniemi ( 1975: p.215 ) より

また、下は谷 ( 2003 ) の表 6 で、the ‘ Wooing Group ’ ( 表中WG ) における独自の集計と、*Margery Kempe* については上記 Koskenniemi ( 1975 ) のものを合わせた表となっている。

1st word	2nd word	WG	<i>Margery Kempe</i>
Anglo-Saxon	AngloSaxon	119( 82.1% )	86( 32.8% )
Romance	Romance	3( 2.1% )	52( 19.8% )
Anglo-Saxon	Romance	9( 6.2% )	65( 24.8% )
Romance	Anglo-Saxon	10( 6.9% )	47( 17.9% )
Romance	ME<OE+ON	2( 1.4% )	
Romance	Old Norse		2( 0.8% )
Old Norse	Old Norse	1( 0.7% )	
Old Norse	Anglo-Saxon	1( 0.7% )	4( 1.5% )
Old Norse	Romance		3( 1.2% )
Anglo-Saxon	Old Norse		3( 1.1% )
Obscure	Anglo-Saxon	2( 1.4% )	

谷 ( 2003: p.21 ) 「表 6 : ワードペア構成要素の語源」

このような様々な中世英語テキストについての先行研究から、古典的な「説明」のペアワード観、すなわち、ペアワードとはロマンス語系の借用語の意味を説明するために古英語由来の語を併置して説明したものとする見方は、ペアワードの一面のみを捉えたものであることがわかる。これ以降のペアワード研究においては、それ以外の機能をも考察することが求められていると考えられる。

もっとも、説明の機能もペアワードの持つ機能の一つではあって、ペアワードの一面を捉えていることもまた事実である。

このことについては谷 ( 2003 ) でも、‘ Wooing Group ’ 中のOF借用語の20例に基づき、「これら個々のOF借用語の例に関しては、説明的であった可能性は大きいと言えよう。」( p.23 ) としている。

これはOF借用語のペアに限定された特徴であり、説明の機能がペアワードの主たる機能ではない点は明記されているのではあるが、この機能の重要性は再認識することができる。

また私見としては、「説明」観それ自体を見直すことも必要ではないかと考えている。「ロマンス語源の語の説明」ではなく、語源に限らず「新奇な語や意味が不明な語の説明」と修正した方が良いのではないだろうか。

こうした可能性については、過去に研究発表の場<sup>2)</sup>において論じたことがある。その概要を言えば、cheer and countenance というペアワードについて、一見 countenance の方が新奇に見え、それを説明するために配置されたような cheer であるが、実際には cheer はテキスト中で多義的に様々な意味で用いられる語であり、逆に countenance とペアになることによって意味が「表情」に限定される。このことから、説明を受けているのはむしろ cheer ではないのか、ということであった。

上述したような説明観の修正が妥当どうか、ペアワード全般に当てはまるかどうかは未だ定かではない。ここでは、ペアワードの機能面のさらなる探求のため、先行研究による統計的な全体像を踏まえつつも個々の用例にあたることにする。決してロマンス語からなるペアのみに対象を絞る訳ではないが、方法論としては上述した谷(2003)におけるOF借用語の例のように、早稲田写本<sup>3)</sup>に出現した個々の用例、個別のペアに基づいて考察を進めていく。

#### 早稲田写本におけるペアワードの分析

本稿において扱うペアは、その内容によって以下のように分類できる。

1. 痛みと悲しみ
2. 救い
3. 泣く
4. 神への訴えかけ

ここからはそれぞれの項について、ペアワードの要素となる語の意味と語源、ペアワードとなる場合の語句の組み合わせなどについて見ていくことにする。

##### 1. 痛みと悲しみ

本稿では Friday と De Sacramento の2章についてペアワードをまとめているが、こと Friday においては、ここで扱う語句のペアは「数あるペアワードの中の1つ」という位置付けに収まらない。これらのペア、特に pain and sorrow を分析し、このペアがテキストの内容に関連して果たしている役割については青木(1996)で分析を試みたことがあり、キリストが受難で受けた苦痛と、それに対して抱く悲しみの融合という、Friday 本来のテーマに大きく関わっていると考えられるものである<sup>4)</sup>。

pain and sorrow のペアが基盤となり、多くの表現に発展してペアワードが作られているものと考えられるが、ここでは、ペアワードを構成する語句の組み合わせに特に着目し、その表現を確認したいと思う。それぞれの語から見て、何をペアの相手にとっているか、何とペアになっているかについてまとめてみたい。

この項においては例が多数のため、以下のようにペアワードをまとめたいと思う。ペアワードやその構成要素である語を分類するにあたって、例えば、

peynful or soriful ( 109rL27-28 )  
 peynes and sorowe ( 118rR2-3 )  
 peynes and sorowes ( 120rL12-13 )  
 sorys and peynes ( 122vR2-3 )

など、様々な形で出現するものについても、ペアワードとして出現する際に頻出する形態か、もしくは原型と思われるものを代表的な形とし、この場合は“sorrow”としてまとめることとした<sup>5)</sup>。分類においては、複数回用いられた組み合わせを優先してまとめている。

以下の表で、ペアワード表現を介した各々の語の関係を見ることができよう。

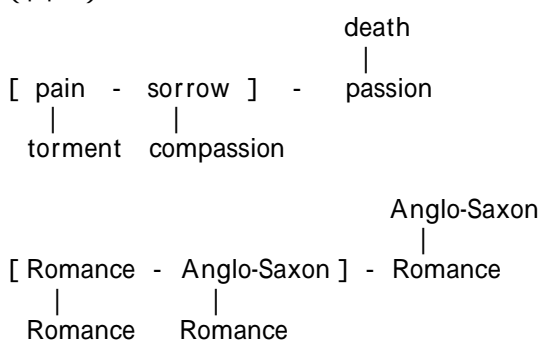
(表) 痛み、悲しみなどを表す語：ペアワードの組み合わせによる分類

1 ) sorrow			
sorrow and <i>compassion</i>	4	sorrow and <i>dread</i>	1
<i>pain</i> and sorrow	4	<i>heavy</i> and sorrow	1
sorrow and <i>passion</i>	3	<i>lamentation</i> and sorrow	1
sorrow and <i>bitterness</i>	1	sorrow and <i>perplexity</i>	1
<i>despite</i> and sorrow	1	<i>weep</i> and make sorrow	1
<i>disease</i> and sorrow	1		
2 ) pain			
pain and <i>sorrow</i>	4	<i>fire</i> and pain <sup>6)</sup>	1
<i>torment</i> and pain	3	<i>hard</i> and pain	1
<i>anguish</i> and pain	1	pain and <i>passion</i>	1
<i>despite</i> and pain	1		
3 ) passion			
passion and <i>death</i>	3	passion and <i>passing love</i>	1
<i>sorrow</i> and passion	3	<i>pain</i> and passion	1
passion and <i>crucification</i>	1		
4 ) compassion			
<i>sorrow</i> and compassion	4	compassion, <i>wonder</i> and <i>worship</i>	1
compassion and <i>love</i>	1		
5 ) death			
<i>passion</i> and death	3		
<i>slay</i> and death	2	} (後述)	
<i>damp</i> and death	2		
6 ) despite			
despite and <i>pain</i>	1	despite and <i>sorrow</i>	1

7 ) perplexity			
perplexity and <i>desolation</i>	1	<i>sorrow</i> and perplexity	1
8 ) toment			
torment and <i>pain</i>	3	torment and <i>trouble</i>	1
torment and <i>illude</i>	1	<i>vex</i> and torment	1

また、このように一覧できるペアワードの構成要素であるが、その数の多寡や組み合わせにより、以下のように図式化できると思われる。図の上半分は語の組み合わせの関係を示し、さらに下半分には、ごく簡略化したものだが、それに重ね合わせての語源の関係を表している。

( 図 1 )



このように、基本的に Anglo-Saxon - Romance の組み合わせを中心に回り合っているように見えるが、sorrow を別にすれば Romance の語句が連なることが多いようにも感じられる。

なお、フレーズ等の表現や、ペアワード周辺に見られた各種の表現についても、言及する必要があると思われるものがいくつかある。

まずは pain とのペアで見られた anguish について。いくつかの語との組み合わせでペアワードにはなっているが、( pain とのペアも含め ) 当テキスト中で複数用いられた組み合わせはない。

fere and anguissh ( 112vL17-18 )  
so gret anguissh & so bitter agonye ( 113vR14-15 )

なお、以下のものは anguish を修飾する語からなるペアワードの例である。

gret and souereyn Anguissh ( 112vL7-8 )

続いて death について。こちらは passion とのペアが 3 例見られたため上記分類に加えたが、以下のようにフレーズとしてのペアに特徴的な表現が見られる。

まずは “slayn” と death もしくは「death を含むフレーズ」との組み合わせで、2 例がペアワードとして用いられている。

slayn and put to that harde deth ( 110vR33-34 )

be slayn and dede ( 111rR7-8 )

こちらは damn、damnation と「 death を含むフレーズ」とのペアワード表現である。

dampned and put to despitous deth ( 131vL18-20 )

goostely deth and euerlastinge dampnacion ( 158rR17-18 )

また、ここでも death を修飾する語句がペアワードとなる例が見られる。

foulest and most horrible deth ( 131vL31-33 )

最後に、scourge について。以下 3 例は scourge と beat からなるペアである。

scourged and beten ( 116vR32-33 )

beten and scourged ( 117rL19-20 )

bete the & scourge the ( 117rR28-29 )

これだけでは上記の語句との関連性はないが、scourge には、torment のペアの相手の一つ illude とのペアの例が一例見られる。

scourged and illuded ( 118vL28-29 )

なお、ここでもやはり周辺語句のペアワードが見られ、pain とペアにもなった hard などの語からなるペアワードが、scourge の近くで用いられている。

the hardest and most bitter strokes of scourges ( 117rL9-11 )

この項で扱った主たる語である pain に関して、

hardest and souereyn peynes ( 112vL12-13 )

上の例のように周辺語句がペアワードとなっているケースもあり、anguish 以下の語について述べたような例が多々あることは確認できたと思う。中心となる語そのものが直接ペアとなっているのではなく、その語の周辺にペアワードが間接的に配置された表現であるが、こうした表現は、本来のペアワードと併せて、全体としてペアワード的な表現を多用し、ある種の文体となることに寄与するものと考えられる。

## 2. 救い

the helth and the saluacion ( 112vR29-30 )  
 the hele and the sauacion ( 113vL17-18 )  
 her helth and her rest ( 113vR16-17 )  
 helth and saluacioun ( 129rR34-129vL1 )  
 helth and saluacion ( 162vR24-25 )

これらは、162vの例を除くと Friday の章のもので、health and salvation は Friday において頻出するペアの一つである。

それに対して Sacrament の章でより特徴的に見られるものは comfort に関わるペアで、以下のようによく用いられている。

comforted and strengthened ( 157vR5-6 )  
 goostly comfort and helth of soule ( 160rR15-16 )  
 comferte and helpe ( 169rR25-26 )  
 conforted & strengthened ( 170rR24-25 )  
 helpe and comfort ( 170vL10-11 )

160rの例は、health とのペアだが、語同士ではなくお互いに語句からなっている。

また、Friday においても comfort のペアは見られるが、以下の例のように相手は joy であった。

oure loye and our comfort and the light ( 131rR33-131vL1 )

なお comfort and joy という組み合わせについては、Koskenniemi ( 1983 ) に言及があり、“ The combination *comfort and joy* - in the reversed word order also - seems to be a set phrase in Late ME texts.” ( p. 79 ) とある。このペアについては、慣例的な表現としての性格が強いように思われる。

このように「救い」などの意味を表すこれらの語、およびそれが用いられたペアワードは、comfort and health で一部共通するなど関連を見いだすことはできるが、Friday と Sacrament という章の違いによってペアの作られ方が大きく異なる例であると考えている。各々の章の内容が関連して、ペアワードの使われ方に何らかの方向性を与える、そのような内容が表現に与える影響の現れではないかと推測される。

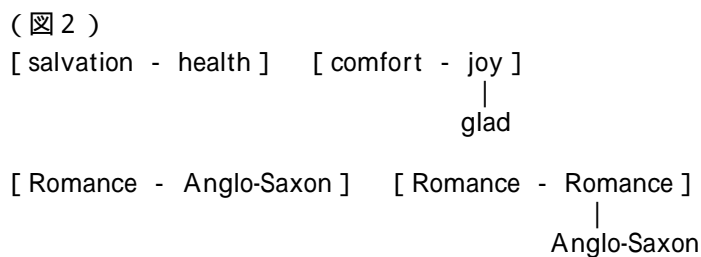
さらに、joy のペアについて。名詞については comfort とのペアを一つ確認したが、“ joyful ” に関しては以下のように joyful and glad が 3 例ある。



ioyful & and glad ( 118rR34-118vL1 )  
 loyinge and gladnesse ( 124rL2-3 )  
 glad and loiful ( 166rR11 )

joyful については他にも “likinge sight”( 125rL12-13 ) “glorious”( 113rL17-18 ) などの語句との間でペアが見られるが、こちらの方の出現はいずれも単発である。

以上を踏まえて、これらの語は以下のように図式化できるだろう。全体としては Romance - Anglo-Saxon の組み合わせを中心にしながらも、[salvation - health] と [comfort - joy] との間には、一部関連性は見られるとはいえ、語の意味を超える違いが存在するのではないだろうか。



### 3 . 泣く

まず、動詞 cry については ask とのペアが 2 例あるが、こちらは「泣く」というよりも「叫ぶ」の意味で用いられたものと推測される。

crie and aske ( 118rR20 )  
 crying and askinge ( 118rL23-24 )

cry も含め、「泣く」の意味の語は以下のような組み合わせでペアワードとなっている。

cryinge and wepinge ( 115rR20-21 )  
 wepinge and sighinge ( 128rL23-24 )  
 sighinges sobbynges and wepinge ( 129vR28-29 )

直前の例は sob も含めた 3 項目のペアワードである。

また、以下の例などから、動詞に交じって tear も、これらの語とともに分類・分析できると思われる。

stronge crie and weping teres ( 124rR34-124vL1 )

これは上の cry and weep ( 115r ) のペアに近い形だが、cry が直接とっている相手は tear である。

weep と tear はここに見られるように同時に表現される場合もあり、互いに排除する関係ではなく、時には共起し、時には代替として用いられる関係ではないかと推測される。以下の例に見られるように、tear が sigh とのペアになっている例もある。

swete teeres and inward sighingges (161vL20-21)

なお、weep については“ wepe and make sorowe ”(129rR1-2、1. 痛みと悲しみ の項を参照) のようにフレーズとのペアも見られるなど、ヴァリエーションは豊かである。

このように、ここで扱った「泣く」に関する語は weep を中心に、そこに tear も伴いつつ、以下に図式化するような関係を持っていると考えられる。

(図3)

cry - [weep (tear)] - sigh  
- sob

Romance - [Anglo-Saxon (Anglo-Saxon)] - Anglo-Saxon  
- Anglo-Saxon<sup>7)</sup>

これに関してはおよそ語源に基づいた古典的な「説明」の機能としては割り切れないものであろう。これらのペアワードについては、語源に関わらず、まず cry の持つ「泣く/叫ぶ」の多義性を念頭に入れるならば、weep と結び付くことによって意味が限定されるという利点がある(前に提示した「新奇的な語や意味が不明な語の説明」)。反面 weep を中心に考えるならば、sigh、sob らの語との結び付きと同様、weep にニュアンスの異なる cry を結び付けることによって多彩な表現(豊かな文彩)が生み出されている、と解釈できるのではないだろうか。

#### 4. 神への訴えかけ

her maister and lorde (114rR23-24)

her maister and lorde (129rL4-5)

上のような例は、当然、宗教的な文章においては頻繁に現れることが予期できるペアであり、当テキストにおいても例外ではない。ある程度の意図と必然性を持ち、これに類する表現は多数使用されている。

なお、ここに見られるペア master and lord に関しては、語順が逆になった例も見られるため、固定化した慣用表現として定着しているかどうかは不明である。

our lorde and maister (127vR9)

もっとも、実際にこれらのペアワードが用いられた場面、その内容を調べてみると、必ずしも祈祷あるいは詠唱していると言えるほどの箇所ではなく、慣例化した祈りのことばが必要とされる状況ではないことがわかる。

しかしながら、慣用表現としてのみ用いられるもの、すなわち意味・意義などは忘れられて用いられる表現とは違い、その度ごとに作成されるペアであるならば、かえってその機能については様々に考察すべき余地があると考えられる。

まるで神の名を何度も呼ぶかのようなこうしたペアワードは、その果たすべき機能として「訴えかけ」と呼べるようなものがあるのではなかろうか。呼びかける対象であろう神に、あるいは聞いている人（読者）に、何度も繰り返し訴えかける。それは非常に強い力を生み出すことがあるのかもしれない。先行研究のいくつかではこうした訴える力を「宗教的」あるいは「強調」等の表現で呼んでいる<sup>8)</sup>。呼び方は様々であるが、このような例はペアワードの持つ力について知る手掛かりとなるのではないかと考えている。

他、いずれも本テキストでは単発であるが、以下の語からなる例がいくつか見られた。

princes and maisters (114vR31)  
 princes and souereynes (115vR17-18)  
 Fadere and god (123rL11-12)

一般的とも考えられるこうした表現がある一方で、以下の例のように、発せられた状況・文脈に依存する組み合わせもある。こちらは、マグダラのマリアが聖母マリアに向けた言葉の中で用いられたものである。

my maistere your sone (130vR13)

また、語の意味としては全くの正反対ではあるが、「罪人」等の言葉についてもいくつかのペアワードが確認できる。これもまた「強調」の機能を果たしていると考えられるならば、このセクションで扱ったようなペアワードと発想の源は近くにある表現なのだろう。ここで論じたような「訴えかけ」とは性質が異なるかもしれないが、関連性は否定できないため付記しておく。

a thief and a wikked doer (116rR29-31)  
 a thief or a wikked doer (114rR3-4)  
 wikked doers and theues (119rL34)

この項で扱ったような表現は、当テキスト以外の場でも多く用いられていることだろう。今後の課題として、これら「訴えかけ」の力を持つと思われるペアワード表現を複数のテキストにおいて分析することも、意義深いテーマとなることだろう。これらの表現に限っても、作品の内容など考慮しつつ詳しく分析することができれば、ペアワードの意味や機能の一端を明らかにすることができるのではないかと期待している。

今回は用例が少なかったため紹介にとどめるが、cruel、malice、wicked らの語に見られるような、「三角形」の形で図式化できるペアワードの組み合わせもあった。語源の組み合わせとしても興味深いものがある。

cruel  
/   \  
malice - wicked

Romance  
/   \  
Romance - Anglo-Saxon

いずれはこうした例についても、本稿で考察を加えた複数の語句についても、他の作品との間で比較・分析を試みたいと思う。ペアワードに関する考察の範囲を徐々に広げ、包括的にペアワードを捉えることができるよう、ひいては中世英語散文の文体の理解につながるよう、研究を進めていきたいと考えている。

なお、今回は扱うことができなかった、ペアワードの音韻面と語源等の関わりについて一言触れておきたい。

中尾(1972)「10.3 句と文体」において「頭韻句 (alliterative phrase)」が扱われているが、それらの語句のいくつかを引用すると、“mid (=with) golde and mid gersume (=treasure)” や “muchel and mære (=much and more)”、“seoc and sorhful (=sick and sorrowful)” のように、ペアワード的な表現であると思われる。これらの頭韻句について、その起源に関する分析がなされている。

「Lay Brut を含むEME頭韻詩・散文には総計871の頭韻句が起こるが、そのうち722は両構成要素ともOE起源であり、57は一方がON起源、28は一方がOF起源、4は両構成要素ともON起源、6はともにOF起源である。」(前掲書、p.492)

これは初期中英語について、頭韻詩を中心に考察された部分であり、なおかつ頭韻句のすべてがペアワード表現という訳ではない。それでもやはり、このような極端な割合を見ると、頭韻的なペアワードの起源はOEが多いという傾向を暗示するものとも考えられる。ペアワードにおける音韻面と語源等との関わりについては、今後改めて研究しなければならないと考えさせられるものである。

## 注

- 1) 青木 (1996) および青木 (2005)。
- 2) 「*The Book of Margery Kempe* におけるペアワードと cheer の意味範疇」日本中世英語英文学会第14回全国大会 (1998年12月、於山口県立大学)
- 3) ニコラス・ラヴ 『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』早稲田写本の底本については、参考・参照文献にも挙げた、金曜日 (“Friday”) の章とサクラメント (“De Sacramento”) の章それぞれの写本の転写を用いている。ただしテキストデータを扱う上で、特殊文字の使用を避けるなど一部手を加えている。また頁・行等の表記については、例えば  
157rL3: (folio 157 recto Left Column 3rd line)  
158vR34: (folio 158 verso Right Column 34th line)  
としている。
- 4) なお青木 (1996) において、この項でも扱った用例など数箇所ミスプリントがあった。こうした誤りについてはお詫びして訂正するとともに、本稿においては訂正後のものを用いていることを付け加えさせて頂きたい。
- 5) 青木 (1996) では “sorys” を sorrow とは別に分類し集計していたが、Sargent (1992, 2005) では “sorowes” とされる箇所であるため、sorrow の異形の一つとして集計する。
- 6) “the fire and the peyn of purgatory” (166vL33-34) にて「煉獄」の炎と苦痛、と具体的に記述された箇所にある。
- 7) *OED* (CD-ROM Version 3.0) にて、sob, v. 1 によると、語源は “app. of imitative origin: cf. W.Fris. *sobje*, Du. dial. *sabben* to suck.” とあり、明言されていない。『英語語源辞典』には “←? MDu. & MLG” (順に Middle Dutch、Middle Low German の略) ともある。
- 8) 特に Leisi (1947) や Koskenniemi (1968) など。

## 参考・参考文献

- Oguro, Shoichi, ed. “Friday” in *Waseda MS (NE3691)*, Waseda, 1999.
- Oguro, Shoichi and Aoki, Shigehiro, eds. “De Sacramento” in *Waseda MS (NE3691)*, Waseda, 2000.
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turun Yliopisto, 1968.
- . “On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*.” *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Sprakforlaget Skriptor AB, 1975, pp.212-218.
- . “Semantic Assimilation in Middle English Binomials.” *Studies in Classical and Modern Philology Presented to Y. M. Biese*. Suomalainen Tiedeakatemia, 1983, pp.77-84.
- Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's “Eneydos”*. Hafner, 1947.
- Sargent, Michael G., ed. *Nicholas Love's Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*. Garland, 1992.
- . *The Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ: A Full Critical Edition* (Exeter Medieval Texts and Studies) Univ. of Exeter Pr., 2005.
- Shibata, Shozo. “Notes on the Vocabulary of *The Book of Margery Kempe*.” *Studies in English Grammar and Linguistics in Honour of Takanobu Otsuka*. Kenkyusha, 1958, pp.209-220.
- Oxford English Dictionary* (Second Edition) CD-ROM Version 3.0, Oxford Univ. Pr., 2002.

谷明信「初期中英語 the ' Wooing Group ' の Word Pairs の用法とその特徴」兵庫教育大学研究紀要第23巻  
第2分冊、2003年、19-24ページ

寺澤芳雄（編集主幹）『英語語源辞典』研究社、1997年

中尾俊夫『英語史II』英語学大系第9巻 大修館書店、1972年

青木繁博「ニコラス・ラヴ『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』考察 1. 早稲田写本におけるペアワード  
- 「金曜日」の章」文芸言語文献学会 JALLP 96、1996年、8-19ページ  
- 「ニコラス・ラヴ『イエス・キリストの祝福されし生涯の鏡』早稲田写本におけるペアワード - 「サクラメ  
ント」の章」新潟青陵大学短期大学部研究報告 第35号、2005年、35-47ページ